

# 令和5年度 西東京市立保谷第一小学校 学校評価報告書

**学校教育目標** ◎ よく考え進んで学ぶ子ども(他者の考えを取り入れ、学び続ける 問題解決力の育成)  
 ○ なかよく助け合う子ども(生命の尊さや自他のよさに気づき、相互に思いやる 人間関係形成力の育成)  
 ○ 元気で明るい子ども(心と体の健康に留意し、進んで心身を鍛える 生き抜く実践力の育成)

**目指す学校像(ビジョン)**  
**【目指す学校像】** ① 子どもを大切にす学校 ② 授業の充実力を尽くす学校 ③ 家庭や地域と共にあり信頼される学校  
**【目指す児童・生徒像】** ① 創造的に、そして深く考え、解決することのできる児童 ② 自他のよさが分かり、誰とも関わりあえる児童 ③ 基礎的・基本的な学力・体力のある児童  
**【目指す教師像】** ① 授業を第一とし、研修を重んじ、その内容充実力を尽くす教師 ② 児童理解に努め、児童の心に寄り添える教師 ③ 当たり前は当たり前、人にまねできないほど一生懸命にできる教師

**前年度までの学校経営上の成果と課題**  
 ・今年度は、ICT機器を活用した授業について研修を重ね、タブレットを授業の中で効果的に活用できるようにしていく。  
 ・今年度は、校内研究において、授業改善を目指し、研究授業を中心に進めていく。今までの研究成果なども精選しながら、習熟度別学習の充実についてもさらに進めていく。

	具体的方策	第1回評価	課題と対策	第2回評価	学校関係者評価	課題と次年度以降の対策
問題解決力の育成	授業の取り組みや家庭学習において、タブレット端末を活用した調べ学習を推進したり、eライブラリを始めとした自主学習の機会を積極的に設定したりすることで、児童の学習への主体性を育てていくことのできるようにしていく。	4	学習単元の導入やまとめにタブレット端末を活用し、スライドやドキュメントファイルなど、与えられた機能や表現方法を児童自身が考えて表現することができてきていると考える。また、算数科を中心に、eライブラリを活用した自主学習の時間を設けることで、児童の学習の主体性を伸ばしていくことができているように捉えることができる。	4	小学生からタブレット端末に日常的に扱うことはとても重要で、プレゼンテーションソフトなどを活用して発表したり、アンケートを取ったりするなど、児童自身が色々な工夫を凝らしていると感じた。タイピングの練習なども続けてほしい。	児童の学習環境の中に、ICT機器、特にタブレット端末の活用が充実してきた一方、児童自身がどのように資料の精選や真偽の判断をしていくか、その指導の仕方や対応を教職員全体で検討していく必要があると考える。ネットリテラシー教育と並行して、正しいタブレット端末の活用法についても議論を重ねていきたい。
人間関係形成力の育成	全ての教科等において、教科で育むべき資質・能力を意識しながら、自らで問題を解決する力を育成する。	4	今年度5月に感染症対策における学習活動上の制約がほぼ解除され、どの教科でもグループでの活動が活発にできつつある。自ら問題解決をしていく力は、自分以外の視点の有用性と解決できた実験が次へとなつていくと考える。引き続き、児童の主体的な学習活動の展開を追求していく。	4	本校の校内研究主題が主体的に学び、問題解決に挑む児童の育成ということなので、引き続き先生方の指導に期待したい。	グループでの話し合い活動や、児童同士の関わり合いの機会が増えたことを肯定的に捉えつつも、校内研究主題に鑑み、その関わり合いの中から児童の学習理解と深化を図れるように引き続き授業研究を重ねていく。児童の興味関心を引き出したその後の学習への繋がりや、教材の工夫や授業展開から促していく手立てを研究していく必要があると考える。
生き抜く実践力の育成	「西東京市子ども条例」や「西東京あったか先生」の理念に基づき、人権教育プログラム等を活用して、児童の発達段階を考慮した学習内容を学年ごとに精選して実施する。	4	人権プログラムを使った職員研修を夏休みに行った。また週に1回のペースで子ども達の良いところを話し合う「あったかタイム」を継続している。日頃から子ども達とどう接するか、心構えについて磨き、学習内容についても各学年の中で相談して進めている。	4	いろいろな行事の後に、異学年間でのお手紙交換をする取り組みがいいと思う。行事を通して、上級生の姿や下級生のがんばりなどをお互いに見て、言葉で伝えるということが大切だと感じた。レインボー班活動を行うことで他学年より親しいものがある児童ができるということは、安心感にもつながっていると思う。異学年交流の経験は、中学・高校・社会での大事な感覚の基礎になる。これからも交流を続けてほしい。	今年度も教員も週1で子ども達の良いところを話し合う「あったかタイム」を継続してきたことで、人権意識を高め合うことができた。また、西東京市子ども条例に関する出前授業を6年生に向けて行ってもらった。市とも連携して、今後も取り組み、個々の教員へ日常的に意識させていきたい。
生き抜く実践力の育成	異学年による縦割り班活動(レインボー班活動)を実施することで、下の学年への思いやりや接し方、上の学年への接し方や集団での社会性を身に付ける。	4	レインボー班活動を定期的に行っている。また、6年生による1年生へのお世話や遊びなどの交流、スポーツデーで発表を見合う、体力テストで高学年が低学年とチームを組んで実施するといった交流を、現状でできる範囲で広げている。引き続き、できることについて追求していく。	4	年間を通して、意図的・計画的に活動することができた。レインボー班活動は、下学年への接し方など集団での社会性を身に付けるという点において効果的であった。またクラブ・委員会・体力テストと、異学年交流はコロナ禍と比べて、従来並みに充実できている。次年度も充実させていきたい。	年間を通して、意図的・計画的に活動することができた。レインボー班活動は、下学年への接し方など集団での社会性を身に付けるという点において効果的であった。またクラブ・委員会・体力テストと、異学年交流はコロナ禍と比べて、従来並みに充実できている。次年度も充実させていきたい。
生き抜く実践力の育成	体育の授業に加え、動画視聴等の工夫や、体育朝会の定期的な実施をすることで、全校で体力向上に努める。家庭でできる運動を紹介し、体力向上への協力・保護者啓発を図る。	3	体育朝会・集会を定期的に行うことができている。例えば縄跳びや集会は、誰もが好きな運動というわけではないからこそ、リズム縄跳びやカードなどで意欲を高める工夫に努めている。保護者啓発については今後も考えていきたい。	3	長縄集会に向けて、体育の授業だけでなく、休み時間にも練習し記録をとって児童自らが成長を実感できる取り組みがいいと思う。順位をつけたい、競わない風潮もあるが、児童自身が得意不得意分野を知り、それぞれが輝ける場を残していくことは大切だと思う。また、そういう場面で小さな失敗や成功を積み重ねることが、時代を生き抜くうえで大切な力を培うことにもつながると思う。日記等を通して、児童と教員との関わりがあるが、複数の教員が関われる体制づくりをみんな考えていく必要があると感じる。	体育朝会は、児童の運動意欲を高めることに有効だった。来年度以降も、長縄朝会は年に2～3回行い、クラスごとの記録の伸びを感じられるようにする。また、縄跳び旬間での縄跳び紹介動画や、持久走旬間での走り方動画も、体育委員会の児童が中心に作成を行った。児童発信の取り組みとなったので、次年度も継続して行うようにする。
生き抜く実践力の育成	「直接相談する」「日記に書く」などの発達に応じた相談の仕方を伝える。また、相談先はどの教職員でもよいことを伝えていく。	4	学年や発達段階に応じて行っているものと考えている。日頃から相談できているから、ふれあい月間で上がってくる案件は少ないのではないかと考えている。相談先はどの教員でも、という点については、子ども達は養護教諭やSCに話に行くこともある。引き続き伝えていく。	3	小さな失敗や成功を積み重ねることが、時代を生き抜くうえで大切な力を培うことにもつながると思う。日記等を通して、児童と教員との関わりがあるが、複数の教員が関われる体制づくりをみんな考えていく必要があると感じる。	担任の先生だけが相談先にならないよう、すべての教職員が児童一人一人に目を配れるよう意識する必要がある。また、意図的に複数の教員が関わるような体制づくりや、学年経営を行うようにする。直接相談がしにくい児童に対しては、日記でのコメントのやり取りなどを継続して行う。
保護者や地域との連携	ホームページや一斉配信メールで、適切な時期に保護者が求めているものを情報発信していく。また、保護者・地域の方に協力していただきながら、家庭学習等が充実できるように学習課題を提供するとともに、地域における教育資源の積極的な活用を図る。	3	ホームページ「ほいち日記」による教育活動の様子や、各学年だより、各学級通信などを通して、意図的に発信することができている。	4	ホームページ「ほいち日記」は、学校の様子が伝わりありがたい。ただ、多忙を極める先生方の大きな負担になっていないのかは気になることである。	「ほいち日記」は、今後も続けていけるように負担にならないようにして作成していく。学年だよりを学校だより裏面にしたこと、ペーパーレス及び担任の負担を少し減らすことができた。学級だよりは各担任の裁量で発行しているが、今後も各自のできる範囲で必要なことを家庭に発信していけるようにする。
保護者や地域との連携	近隣小中学校と日常的に連絡を取り、小中9年間を通した教育活動の在り方や生活指導等の連携を強化する。中学校入学への不安感を減らすため、6年生は栄小学校6年生との交流、青嵐中学校の部活動体験を行う。	2	一斉配信メールも、学級閉鎖の対応など、急を要する場合を含めて有効に活用できていると考える。引き続き、発信に努める。	3	小中連携に加え、コロナ禍前に行っていた小中連絡の連携交流も今年度は復活したということ次年度以降も期待している。また、「わくわく栄」のように、地域と学校がもっと密に連携を図ることも必要だと感じる。	コロナ禍を経て、小中連携、小中連携、幼保小連携のそれぞれの交流が復活したので、今後も更なる交流を続けていきたい。
保護者や地域との連携	「いじめ」「児童虐待」は許さないという意識をもち、子どもの変化を見逃さないよう未然防止に努める。また、定期的な会議をもち情報の共有、関連機関との連携を図る。	4	子どもへの情報については、月1ペースで行っている校内委員会や生活指導夕会で共有している。メンバーに養護教諭やSCが含まれているため、組織としてどのように考えるか、対応の方針を共有している。いじめとみられる事案についても、担任が1人で抱え込まないよう、日頃から子ども達のことを話し合い、すぐに共有できる雰囲気・関係作りを努めている。また、長期休暇中には学校以外の相談機関の連絡先について手紙で周知した。	4	「いじめ」の定義が変わったことで、定期的には感じ方がちがうので、その感じ方を、保護者や教員、周りの大人がフォローしていく必要があると思う。	校内委員会でも話し合い内容を厳選するとともに、児童の様子をしっかり共有できるように、普段から教員間で情報共有をしておく。また、コーディネーターを中心に、情報をまとめたり、教育支援システムを定期的に入力して共有しやすくする。「いじめ」の定義を再度確認をし、必要に応じて「いじめ対策委員会」を開く。
保護者や地域との連携	しらうめ学級主任を中心に、特別支援教育の充実を努める。また、具体的な指導法を学級担任等と共有し、一人一人の子どもたちの気持ちや考えに寄り添う指導の充実を図る。	4	S教室1教室合わせて、98名でスタートし、10月からは114名を教員7名と専門員で協力して運営している。通室児童については、日常的に関わり方など保護者と担任と情報を共有している。来年度から巡回型で特別支援教室の指導を行うための準備を各校と連携し進めている。保護者、教職員に向けて、次年度からの特別支援教室の指導についての理解啓発を進めていく必要がある。	4	特別支援教育に関しては、来年度から新しい体制に変わるといことで、少し不安がある。	来年度から、特別支援教室が巡回型になるため、保谷第一小学校に特別支援教室教員がいない日があるため、より一層情報共有をとっていく必要がある。また、特別支援教室専門員との連携も密にとつていき、児童の様子を見たり、児童の困り感への気づきを強化していく。
働業務方改善改革	会議を行う曜日を工夫する等、授業を通じて子どもと向き合う時間を確保する。また、学年始、学期末に事務整理日を設けることで余裕をもって校務にあたるようにする。	4	会議の種類、構成メンバー、内容を精選・分化することで、それぞれのポジションで見通しをもって運営することができている。今後も教材準備のための時間確保、業務の効率化を図っていく。	4	いよいよコミュニティスクールになるが、教員ではなくてもできるような業務をボランティアで募るなどして、教員の働き方改革の一助を担えるのではないかと考える。	教職員全員が、ライフワークバランスについて目標をもち、取り組むことができた。これからは、教職員が準備にかけた時間と、児童にとって有益なものかを常に話し合い、児童への学習効果を落とすことなく、効率のよい働き方を見出していく。